



国立歴史民俗博物館 （歴博）について

201911 国立歴史民俗博物館 久留島浩

目次

1 歴博とは

- 1) 歴史系博物館を持つ大学共同利用機関 / 2) ミッション
- 3) 現在の課題＝「総合資料学」の創生 / 4) 歴博の研究上の特色

2 常設展示の検討における留意事項や工夫、展示の時代区分の考え方

- 1) 常設展示（「総合展示」）での留意事項
- 2) 展示内容を構築するうえで（歴史系博物館として）留意した点
- 3) 展示の時期区分の考え方について

3 多様な観客への対応について

- 1) 車いす利用者や障がい者が展示を楽しむために
- 2) 小・中学生が展示を楽しむために
- 3) 外国人集客についての工夫

1 歴博とは

1) 歴史系博物館を持つ大学共同利用機関

(人間文化研究機構に属する研究機関)

2) ミッション

3) 現在の課題 = 「総合資料学」の創成

4) 歴博の研究上の特色

1) 歴史系博物館を 持つ大学共同利 用機関

(人間文化研究機構
に属する研究機関)

「大学の共同利用の研究所」として、大学では実現困難な高度の人的・物的資源を大学等の利用に供するとともに、国際的な共同研究を推進。

⇒日本の歴史と文化に関する総合的な研究を組織的かつ持続的に推進するために設置された大学共同利用機関である。

2) ミッション

人類の歴史的営為が複雑に絡み合った現代社会において、自らの未来を展望することができるよう歴史観・歴史想像力の獲得と、歴史認識を異にする人々の相互理解の実現に寄与することにより、日本の歴史文化研究のナショナルセンターとしての役割をもっている。

【公式ミッション全文】

「歴博は、日本の歴史と文化に関する研究を組織的かつ持続的に推進するために設置された大学共同利用機関である。その使命は、人類の歴史的営為が複雑に絡み合った現代社会において、未来を切り拓く歴史的展望の獲得と、歴史認識を異にする人々の相互理解の実現に寄与することにある。歴博は、歴史資料・情報の収集、整理、保存、調査研究そして提供という一連の機能を有することを最大の特色としている。これらの機能を有機的に連携させた博物館型研究統合によって、有形無形の多様な資料に基づき、文献史学・考古学・民俗学及び自然科学を含む関連諸学の学際的共同を通じて、現代的視点と世界史的視野のもとに、日本の歴史と文化に関する基盤的並びに先進的研究を推進する。大学共同利用機関として、そのすべての機能を国内外の研究者と共有するとともに、次代を担う研究者を育成し、それらの活動を通じて広く国内外の人々に日本の歴史と文化への理解を促進する。」

→**歴博は、総合展示を成長させ続けることを、今後の館の在り方との関わりで最重視している**

メタ資料学研究センターの設置

3) 現在の課題 = 「総合資料学」 の創生

- 日本の歴史と文化に関する大量かつ多様な資料を総合的に研究するメタ資料学研究センターを設置し、様々な学問分野からのアプローチによる日本歴史の再構築と異分野連携・融合を図る総合資料学を構築し、日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤を形成し、大学に対し、研究・教育の両面でその質的向上に貢献する。
- さらに総合資料学によって得られた成果をミシガン大学出版会から出版するなど、日本の歴史と文化に関する新知見を国際的に位置づけて発信する枠組みを構築し、学術研究の発展に貢献する。



国立歴史民俗博物館

総合資料学の創成

INTEGRATED STUDIES OF CULTURAL AND RESEARCH RESOURCES

4) 歴博の研究上の特色

① 全てが、プロジェクト方式共同研究をベースにしている

研究テーマはすべて公募型歴博の研究者が提案するプロジェクトテーマもある

歴博としての主体性の問題
プロジェクトの成果は、著書・論文集（紀要）やシンポジウム・フォーラムなどで公表するとともに、展示に活かすことを基本にしている。

⇒総合展示のリニューアルも企画展示も国内外の研究者を組織したプロジェクトで実施した共同研究を踏まえて、展示を構築する

② 発足当初から、「文理連携型」の研究を進めている

分析科学・保存科学

炭素14年代測定法、

素材分析

人文情報学

2

常設展示の検討における 留意事項や工夫、 展示の時代区分の考え方

基本的には、1997年の『第三者評価報告書』を受けて始まったリニューアル検討委員会（「実行委員会」1999年）での議論と外部評価、そして2008年の近世展示リニューアルを踏まえた方針がもとになっている

1) 常設展示 （「総合展示」） での留意事項

ただし、いまだに
「課題」でもある

★研究→展示という回路を目的意識的に
追及すること（さらに、展示⇒研究も不
可欠）は、大学共同利用機関としては譲
れない点だが、

「大学共同利用の研究機関としての側面
と、生涯学習時代の市民学習機関として
の博物館の側面をいかに両立させるか」
（『第三者評価報告書』1997）

は依然として課題のまま。

ポイントは 以下の5点



01

「実際の観
客の視点」
が欠如

* 多様な来館
者向けの対応



02

「説明型・
一方向型の
展示」から
の脱却



03

多様な展示
技術の積極
的な導入



04

動線をわか
りやすくす
る

* 単線化ではな
い!



05

解説をわか
りやすく、
読みやすく
する

①「実際の観客の視点」が欠如 多様な来館者向けの対応

○「学術性の高さー学説展開型展示」としては学界から高い評価を受けてきたが、「研究者の自己満足」に陥っていないか

⇒来館者調査が必要であることは現在では「常識」

しかしその結果を踏えて**展示を「成長させる」というフォローアップの必要性**（展示はつくったら終わりではなく、むしろそれからが始まり＝可変的な展示、一言付け加えることのできる展示）はまだ十分ではない

② 「説明型・一方向型の展示」からの脱却

○ 「世界の博物館界では、

体験型・参加型・双方向的展示への動き

が大きな潮流」

⇒ もはや、当然のことになっている

○ 体験・参加型展示（くらしの植物苑！も含めて）「五感（できるだけ多くの感覚）で感じ取れる」展示 触ってほしいものはサインで明確に 複製を実際に手にとってみることができるよう（間近で観る） なお、観客自身の「行為・展示評価」があると理解は深まる そのためにも「入館者研究」が不可欠 来館者の「満足度」をはかる方法自体を実践的に研究することそのうえで、すぐにいつでも「改善」すること＝可変的な展示

③多様な展示技術の積極的な導入

○いまでは、これは必須だが
課題も一杯あることもたしか

映像技術の活用

（ビデオ解説は有効だが、3分を超えると立って聞くのは辛い）

照明技術、音響技術、デジタル技術

日々「革新」⇒「試行実験」をしてから導入するとすでに古くなっている

○「更新」することが金銭的にも、技術的にも
「無理なく」できないと、結局あるところで、使えなくなる
⇒想像を超えるスピードで変化している（良くなる可能性もあるが）

○スマホの活用も今後進むはず

⇒歴史的資料と向き合い、資料が語りかけてくれる情報を読み取り（耳を傾け）、自らの歴史像を構築する能力は、鍛えなければ身につかない。

AIで「古文書を読む」という試みを否定しないが、現状ではまだ一部しか使えないうえに、おそらくその先の解釈は「ブラックボックス」でしかない。

⇒現在、期待できるのは、「みんなで翻刻」

今必要なのは、

数億は下らない近世・近代の史料を把握し、目録化すること（できるだけデジタル記録化もすること）によって、どこに、どの程度、何が残されているのかを把握すること

＝大水害で、何が失われたのかさえわからない！！ 何も救えない！！

④動線をわかりやすくする *単線化ではない!

○動線がわかりやすいことは最低条件かもしれない

○しかし、実は、実際に、さまざまなところに展示している資料を
結ぶ動線は一つではない

＝来館者の「展示を観る力」次第では、多様に存在する

○実は、ギャラリートークをしてみると、そのコーナーでもいくつかの
「ストーリー」がありうる

○選択可能な観覧動線と観覧時間の明示

⑤解説をわかりやすく、読みやすくする

○そもそも、文字が多い。字が小さい。暗い。

○歴史系博物館は、どうしても展示資料が文字資料になりがち

これをどのようにわかりやすく見せるか？ 内容を伝えるか？

しかも、実は「読み」も難しいいうえ、解釈もそう簡単ではない

その資料が作成された背景や意義については、

ある程度の解説は可能だが、

そうすると、現物の資料と向き合うことの意味は？

実際に、ストーリーのうえで不可欠なものは、「複製」となる場合が多い

○解説を「重層構造」にすること

小学生向き（それ以下も含む）・成人向き・専門家向きなど

⇒ 「ソフト面でのリニューアル」

▼観客調査の結果を生かして、観客の視点にたった展示を実現

▼さまざまな教育プログラムを充実

体験コーナー

複数の音声ガイドシステム

複数の解説パネル

ギャラリートークの制度化

ボランティアガイドシステムの構築など

⇒生涯学習時代に適合した、観客に応じたきめ細かい対応のできる
新しい歴史民俗系博物館モデルを構築する